

子どもの遊び場

一和歌山大学学生にみる原風景

A Study on Child's Playground from the Viewpoint of the Primal Scene in Students of Wakayama University

梅原清子
Kiyoko UMEHARA

2006年10月11日受理

1、研究目的

子どもは、自然との関係や生活と物との関係、人と人との関係のとりかたなどを、遊びを通じて把握していく。しかし、今日では、都市化、少子化、情報化、空間の閉鎖化、家庭地域の教育力低下など生活環境の変化により、外遊びをしない、遊ぶ仲間が少ない、玩具がないと遊べない、など子どもの遊びが脆弱になっていることも危惧されている。だからこそ、子どもの遊びや遊び場に関する先行研究は数多い¹⁾²⁾³⁾⁴⁾⁵⁾。子どもとそして大人を元気にするまちづくりの取り組みも盛んである。

子どもの頃にすごした場所や環境は無意識のうちに人間の価値観に影響する。奥野健男は『文学における原風景』⁶⁾で、日本人の原風景として原っぱをあげているが、今の子どもたちはどのような「人間形成空間」をもっているのだろうか。そこで、対象として子ども期を“卒業”したばかりの大学生を選び、子ども期の遊びについて、どこでどう遊びどのような想いを抱いていたのか、遊び場の原風景—子ども時代の記憶からとらえることにより、子どもの遊び場の意義を考えようとした。また学生自身にとっても、自分の子ども時代の遊びの体験や感覚を掘り起こし、持ち続けることは、今の子どもの目線に立つことであり、大人として将来の教師として、きわめて有用であるとおもわれる。

2、研究方法

和歌山大学教養科目「子どもと暮らし」の授業中、出席している受講生に提出させたミニレポートの記述内容を分析した。

レポートのテーマは「私にとっての遊び場・原風景」である。本科目は複数の教員による分担で行われ、本授業は子どもの住空間やその住み方について扱った「子どもと住生活」の一部である。2005年12月5日の実施で、レポート提出者は120人であった。授業開始直後に記述用紙を配布し、回収後に子どもの遊び場を中心とした地域の住環境について講義した。記述に充てた時間は15分弱である。テーマについては「自らの子

ども時代をかえりみて、パッと思い浮かぶ遊びについてできるだけ詳しく書くように」と指示した。また子ども時代とは、ほぼ小学校段階まで、と補足した。厳密にいうなら、原風景とは原体験を想起させるイメージのことで多分に限定的であるが、学生のレポートには自らの遊びについてその履歴や、複数に及んで列挙する記述も多数含まれていた。そこでここでは原体験のことを、「記憶に残る遊び体験」と拡大的に捉えて、すべて採り入れることとした。それらを出来るだけ忠実に拾い出し、さらにKJ法を用いて、分類、コード化した。と同時に、学生の記憶や感想を原文に近いかたちで採取し、遊びのイメージを有機的に把握するよう試みた。なお採録したものにはイニシャル1文字と男女の別だけを付した。

学生120人の属性は、記述からみると以下のようである。所属学部については、教育学部68%、経済学部20%、システム工学部12%、と教育学部生が多く、性別については、女子が71%を占めている。学年については1回生が83%と大半を占め、残りは2～5回生に散在する。この学年構成からすると、1980年代半ばに出生、1990年代にかけて幼児・小学生時代をすごしていることになる。

3、結果および考察

(1) 遊び空間

どこで遊んでいたかについて、レポートで記載の多かったものをみていく。図1に示した。

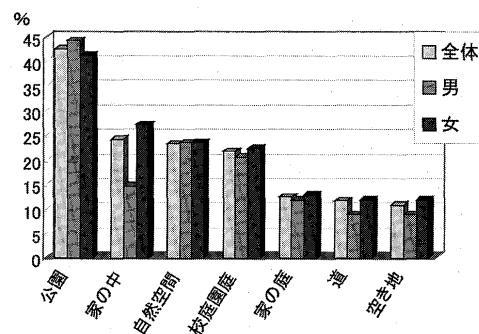


図1 遊んだ場所(主なもの)

(全体120人、男34人、女85人に対する比率で示す)

① 公園

目立って多いのは公園であり、51人(43%)の人があげている。男子では44%、女子では41%であり、男女差は殆どない。「近くの公園」「住んでいた団地の公園」というものが殆どで、公園が子どもの時から身近に存在していたことがわかる。対象となった学生は、都市部出身が多いということでもあろう。ここにいう近くの公園とは、都市公園法にいう半径250m、0.25haを目安とする子どもの利用を想定した街区公園が代表的なものであろう。街なかでゾウやタコなどを模した遊具が置かれたりして、子どもたちがよじ登っているのを見かける。その他、もう少し小規模な児童遊園、或いはポケットパークに類するものも対象であろう。逆に規模の大きい近隣公園等も含まれるかも知れない。また、集合住宅居住が多いとみられ、団地内の公園も多数含まれている。ともかく公園と記されるものはすべて数えた。因みに国土交通省によれば、全国の一人当たり都市公園等面積は8.4㎡(2001年現在)であるが、対象時の1991年では5.8㎡であった。近年はこれらの公園の整備が進み、都市住民の徒歩圏内に整備されることが多くなった。

さて、子どもの頃に遊んだ公園はどのようなものだったか。「ブランコと鉄棒しかなくても、幼かったので何度もくり返し飽きずに乗った」(S女)小さくても遊具が揃ってなくても、子どもは子どもの感性で遊んでいる。小さい頃は全てがとても大きく見えて、1周走るだけでも広く感じたが「大きくなってから久しぶりにそこへ行くとびっくりするぐらい全てが小さく感じた」(T女)このようなスケール感覚を持つ人は、公園に限らず他にも多々みられる。仙田はこれを「俯角の記憶」と呼んで子ども期の特徴的な感覚とする⁷⁾。

いつも家のすぐ近くの公園で遊ぶので「少し離れたところにある別の公園に行きたい気持ちを抑えるしかない時期もあった」(Y男)というものもある。親から禁止され、或いは行こうにも手段がないのであろう。年齢があがるにつれ遠方の公園まで出かけるようになっていく(O男)。自転車を乗り回すことが出来るとそれまでに比べ飛躍的に遊びの行動範囲が拡大する。「家の近くに無くて、休日に母に遠方の公園まで連れて行ってもらった」(N女)もみられ、やはり公園は子どもを引きつけるものがあるのだろう。

「けが人が出たためブランコは取り外されてしまった」(O女)、「公園は見晴らしがよくてすぐ鬼にみつかってしまう」(S女)、「ボールがよく隣接のため池に飛び込んで、そこにはボールがいくつも浮かんでいた」(H女)、など規模が小さすぎたりして、当時から遊びにくいと意識される公園もあった。

公園は人工的だとかお仕着せのすぎ、と批判もあるが、子どもは後で見るように遊具だけで遊ぶわけではない。どんなところでも遊びを見つけて遊ぶ。「団地の

公園では、異年齢の子ども集団で、自分たちで作った遊びもやり、僕らにとったら縁石やベンチも遊び道具」(M男)なのである。仙田によれば「整理整頓された美しいあそび場も、アナーキースペースも、“公園”としてつくらねばならないというのが現代という時代」⁸⁾ということになる。

② 家の中

一般には1960年代中頃より内あそびの時間が外あそびよりも長くなったといわれている。遊び場として数の上で次に多いのが家の中で、29例、24%であった。これについては、他と異なって男女差がみられた。女子の27%に対し男子は15%に過ぎない。遊びの種類に関連していようが、やはり、女子の方が家の中でできる静的な遊びをしがちなのかも知れない。家の縁側が遊びの定位置でそこに置いてある本を片端から読み、好きなだけ絵をかき、牛乳パックで工作をするなど、「最新のおもちゃとは縁のない遊び」(N女)と満足している人もいる。

家の中とはいっても、自分の家だけでなく友だちの家に行くことも多いし(12人)、雨の日は家の中で(N女、H女、S男)のように雨のため外で遊べない時や、遊び仲間が多い場合は外と決まっていると、状況に応じて選択されるのが普通であろう。だが、少数(5人)ではあるが、専ら室内が遊び場だったという人もいる。「だれもが集まり、ピアノがあって積み木や折り紙など遊び道具が全て置かれたリビングは私にとって居心地よい思い出の場所」(D女)や「外で遊ぶより家の中が好きでした。子ども部屋にはジャングルジムやすべり台が置かれ、弟たちと何時間でも遊んでいた」(K女)というものから、「小さい頃から外に出て遊ぶのが嫌いで」ほとんど家の中で人形遊びや絵をかいていて「そのせいかどうか体育が本当に苦手でした」(Y女)というもののまである。「外で遊ぶのは学校の昼休憩ぐらい、やはり今の子は外遊びが減っている」(W男)と断じる人や、また家の中ではないにしても「いつも親の目の届く所で遊んでいた気がします」(N女)という人もいる。

家の中で遊ぶことが多いと自覚している人の多くは、そこが遊具が揃えられたりして子どもにとって居心地よくできているという傾向もあるだろう。子どもの年齢、性格また家庭環境によって、家の中か外かは決まるのであろうが、概して、家の中での遊びは歓迎されない。親は子どもの遊びについて「家の外で遊ぶこと」を第一に望んでおり、逆に「家の中で遊ぶ」は零に近いという調査結果もある⁹⁾。引きこもりなどのマイナスイメージも関係して「子どもは元気に、外で！」が浸透しているといえようか。

③ 自然空間

川や山、田んぼや畑、など自然の中で遊んだ記憶は28人、全体の23%があげている。これは、男女差はまっ

たなく男女とも同率である。その自然スペースでは、田んぼ、畑、川、山など43ヶ所が記載されている。自然の流水や舗装されないむき出しの地面、草木、魚や昆虫の動植物とふれ合う場所である。稲を刈り終えた田んぼも、野球のできる格好の場となった(N男)。本学が地方大学であるため、自然の多く残された地域の出身者が比較的多いということもあろう。ミカン畑やカキ山という和歌山らしい場所もみられる。「家族と一緒にミカン取りに行ったら畑で妹たちと遊んで」「夜はミカンの撰かをする横で妹たちとかくれんぼなどして遊んで」いた(I女)、「幼い頃は田んぼで働く親について行って兄妹で遊んで」いた(A女)というように、家族が総出で農業にいそしむ生活がうかがえる。遊びながら、働く親の姿を間近に見て育つことになったであろう。

「畑には、 TENTウムシ、カマキリ、カエル、沢ガニ、トンボ、など沢山の生き物があふれていて、手でつかみ取って遊んでいた」(Y女)、「山の中に住んでいるので家のまわりが遊び場、忍者ごっこだと言って段々畑の数メートルの高いところから飛び降りていた」(N女)、「家の近くに海があったので、テトラポットで遊んだり、中国とかからの漂着ゴミで船を作って流したり、たまに岩で足を切ったりもした」(N男)、「親には言わずに、川で泳いだり自転車で遠くの池まで釣りに行ったりした。今考えてみるとかなり危険なことをしていたなと思う」(K男)、「学校のなかにある山の斜面でつまずいたり転びそうになったりして泥だらけ。さみしいことに今では山はく入るな、キケン>」(T女)。

自然空間でのあそびは、安全な環境ばかりでなくリスクを伴うといってよい。子どもたちは遊びながらそのことを学習する。ここにあげた人たちは大人になった今、自然の遊びのダイナミックでスリリングな醍醐味を噛み締めているように思われる。

④ 校庭・園庭

学校の運動場や保育園の庭、つまり校庭や園庭も26人、21%みられる。これも男女差はほとんどない。

空間、仲間、時間のいわゆる三つの間は、遊びにとって必要な要件であるが、これらすべてがそろっているのは、今や学校にしかない、といわれる。校庭は、大休憩や昼休みに最大限活用される。これについては11人があげていた。「運動場は各クラスの取り合いがすごかったので、チャイムが鳴るとすぐにボールを持って外に出ていた」(S女)、「ドッジボールをするための場所取りをする係の人までいた」(M女)と狭い校庭で競うようにひしめいていた様子がわかる。「小学校には花や遊具がいっぱいあって、朝の始業前の30分にみな来て遊んでいた」(C女)これは留学生のものだが日本でも似た状況がある。「周りには公園のようなものはなかったのに対し、学校は広いし、遊具はあるし、家の遠い

友だちとも遊べて、一番の遊び場」(S女)と、限られた時間でも精一杯遊んでおり、校庭は活用され、評価は高い。保育所のお迎え時、母親が来てくれても園の遊具や友だちともっと遊びたくて、また迎えの遅い子が遊戯室で遊ぶのがうらやましく、母に1時間遅く来るように頼んだという人もいる(H女)。

次に、学校の放課後や休日の学校(とくに運動場)でも遊んだという人は13人いる。幼稚園の時から小学校で遊んでいたという人は、そこが家から徒歩1分という至近距離で「当時は治安もよく、勝手に入って遊べた」といい、「運動場(とりわけ遊具のある小学校の)で遊ぶのは子どもの特権ではないか」と記している(Y女)。学校には遊具が沢山あって休み時間遊ぶだけでは物足りない。次のような告白もある。「学校の備品であるバットやグローブを勝手に保管しておいて、放課後、暗くなるまで野球するのが流行った」(Y男)。少なくとも運動場では放課後や休日にも自由に遊べることが望ましい。柵もなくいつでも入れる、学校開放が当たり前の時代もあった。しかし管理責任の問題が絡み、常時開放はきわめて困難な状態である。

⑤ 家の庭

庭で遊んだという人は全部で15人、男女差はない。家の庭といっても友だちの家やマンションの庭という場合も含まれるが、一般には親の目の届く安心なスペースである。

「田舎なので庭で十分なスペースがあり、わざわざ遠くの公園にいくという感覚はなし」(T女)とあるように、子どもが走り回る程度のスペースは確保されているようである。なかには「マウンドとホームの距離は庭の端と端、打球は隣家に飛び込む」という状況ですら、自宅の庭で野球をしていたという人もいて、帰省のおりもその狭さに感慨したという(A男)。友だちの家の庭には「自家製のバスケットゴール」があった(N男)、家の庭には柿の木の横に「ブランコ、砂場や一輪車練習用の手すり」があった(K女)、の例のように子どもの遊びを支援する遊具が備えられる場合もある。「干してある洗濯物を落としておこられながら」友だちと駆け回って遊んでいる様子を思い出している。

⑥ 道

道は本来、大人や地域の生活や仕事が出される場であるとともに、車社会になる以前は子どもの遊び場であった。交通事故多発の1960年代以降、「子どもは道路で遊ばない」が不文律となってきた。しかし現実には、道でボール遊びなどする子どもは決して少なくない。男女の別なく14人の学生があげており、このうち8人は「家の前の道」としている。とくに路地や、通過交通の少ない住宅地内の道路やスプロール地域にありがちな行き止まりの私道は、大人の井戸端会議にも使われるコモン・スペースという感があって活発な遊び場のひとつである。自宅の前は、幼児なら親の目が

届き安心であり、もっと大きい子どもでもいつでも遊べる便利な場所である。「車が来るときは不便だが家の近くなので暗くなるまで遊べ、そしてすぐに家に戻る」(I男)からである。「その道は細く、車がぎりぎり1台通れる位で、ほとんど車通りがなく、走り回ってもボール遊びをしても安全でした」(M女)道に並ぶ家の子どもたちは、いつも一緒に遊んでいたという。

「自転車に乗れるようになって家の前の道を行ったり来たり」(K女)を楽しんでいた、「チョークで道路に落書きをした」(I男)、「ジョーロの水で道路にコートを作って」バドミントンをした(S女)など、道を活用して遊んだ当時の様子を記している。

また、これとは少し異なるが、学校からの帰り道でも「いろんな遊びを思いついて、いつも遊びながら」(M女)、「道端の水路にササ船を浮かべて競争したり、いつもと違う道を通ってみたり」(S女)友だちと道草を楽しむ小学生ののどかな下校風景がうかがえる。

だが今日では、交通事故ばかりか、子どもを狙った犯罪の続発によって通学路の安全が脅かされ、家の前の道ですら地域社会が監視の目を光らせざるを得ない状態になってしまったのは周知の通りである。この問題は今後も子どもの遊び場のあり方を大きく塗り替えることになるだろう。

⑦ 空き地

13人、11%があげている。ここでは、原っぱ、広っぱと同義で使っている。漫画の「ドラえもん」にも土管のある空き地が出てくるが、冒頭でも触れたように、子どもの遊び場の象徴のようなものであった。そのような空き地の、文化といってもよい郷愁をよぶイメージからすると、この比率は過少と思われる。

空き地についての思い出は、次のようなものである。「そこは雑草が生い茂り、昆虫が生息していた。その中を友人と一緒に走りまわっていたが、小さく幼かった自分には絵本でみる草原といったような感じであったのを憶えている」(S男)、「草むらや広場で鬼ごっこをしたり、虫捕りをしたり、捨てられていた空き缶を使って缶けりをしたり、何もない広場には遊具のある公園よりも、もっと多くの遊びが詰まっていた」(T女)、「休みの日になると、どこからか親子が集まりボール遊びをしたりする笑い声が絶えない所」(W女)。

いっぽう、空き地には「埋立地で、…捨ててあった割れた茶碗が足に刺さって血だらけになった」(S男)、「地面が砂利だったので、こけるとかなり痛かった(がおかまいなしに遊んだ)」(N女)、という痛い思い出もある。そして「今ではもう何軒かの家が建てられて」「昔の面影はない」のである。このようにかつて遊んだ空き地が開発されて宅地や駐車場に変わったと言及するのは、5名いる。つまり彼らの子ども期には、遊び場としての空き地はすでに一般的なものとはいえなかった。あっても遊び場として十分なものではなく、その

うえこの時期に空き地は次々消えていったことが読み取れる。「学校から帰るとすぐグローブを持って集まり野球した空き地」は家が建つことが決まり、別の空き地に出かけたがそこは「周りに家が立ち並んでいてボールがよく家の中に入る」ので、ボールを誰が取りにいくか相談した(M男)という記述にもそれが表れている。

⑧ その他

特徴的な遊び場としていくつかの例をあげておく。

まず、神社を5人があげている。昔から鎮守の森として親しまれてきた神社の境内は、公園とはまた違う雰囲気醸しだす、子どもの遊び場の原型みたいなものといえる。砂利の敷かれた広場、石段、薄暗い森、人けのない舞台など、格好の遊び場であった。「四方八方隠れる場所があって缶けりが楽しかった」(M男)、「クワガタやカブトムシを捕った」(S男)、「裏手の竹やぶで秘密基地を作った」(N女)、など語られるがその数は全体では多くない。都市化の中で、神社は物心ともに身近なものではなくなったのである。「竹が切りとられ妙にすっきりしてしまっただけからは、あまり行くことがなくなり」さびしく思った(N女)という人もいる。

マンションの共有廊下や階段をあげる人は4名いた。前述の「家の前の道」の感覚であろうが、車の事故はないにしても、遊び方によっては住民から苦情や注意も受けやすい。「階段で遊ぶのは危ない」と親や近所の人に注意された(U男)危ないだけでなく、騒音など迷惑と思う住民は、子どもたちを諫める。しかしまたエレベーターホールで人形遊びやままごとをしていると、通りがかりの大人が「いい場所みつけたね～」などと声をかけてくれた。この人は、マンションで遊んだり話し込んだりしている今の子どもたちを見かけると、自分の頃を思い出してほほえましく思う(O女)という。

駐車場も4名いるが、一般には子どもの遊び空間としては危ないと言わねばならない。だが従来の遊び場だった空き地が変貌して駐車場になったものである。コンクリート敷きなので「ボールを使う遊び」やローラースケートをするには好都合ということもあるようだ(M女、S女)。駐車場が自宅か外部のかでは違うし、運転者の言い分もあるが、道路と同様、ここでの遊びを禁止するばかりがよいとはいえない。

ここで、子どもの外遊びを演出する駄菓子について見ておく。6人が触れていた。駄菓子屋は、子ども相手の小さな商店で、子どもの遊ぶ公園の近くなどにみかける。お店の前の道が子どもの遊び場たまり場になっていることもある。「近くの駄菓子屋でお菓子を買って、川の土手に座ってみんなで食べた。食べ終わると川で水きりをして遊んだ」(H男)、また「百円で袋いっぱい駄菓子が買えた」(H女)というように値

段は安い。近年、コンビニにおされ駄菓子屋は廃れてきているが、オバチャンとのコミュニケーションや小遣い対効果の点からは捨てがたいものもある。買い食い自体は、衛生上しつけ上、賛否が分かれようが。

(2) 遊びの種類内容

記載数の多かった遊びについて表1にまとめた。これによると、多いものでは、鬼ごっこの47件を筆頭に、かくれんぼ、砂遊び、ドッジボール、ブランコなどがそれぞれ20数件である。

遊びの特徴により類型分類すると、駆け回る追いかっこ型、ボールで遊ぶ球技型、固定遊具型が一線に並び、ものをつくって遊ぶ造形型、いわゆるごっこ遊び型、虫や草木と遊ぶ自然採取型、自転車などを乗り回す乗物運動型、とでもいえる。

表1 遊びの種類 (主なもの)

	全体 (件)	(%)	男子 (件)	(%)	女子 (件)	(%)
鬼ごっこ	47	36.7	9	26.5	38	44.7
かくれんぼ	24	20	7	20.9	17	20
缶けり	9	7.5	6	17.6	3	3.5
小計	80	66.7	22	64.7	58	68.2
野球・キャッチボール	18	15	12	35.3	6	7.1
ドッジボール	23	19.2	9	26.5	14	16.5
サッカー	14	11.7	10	29.4	4	4.7
バスケ・バレー	8	5	3	8.8	5	5.9
卓球・パド・テニス	4	3.3	3	8.8	1	1.2
キックベース	2	1.7	0	0	2	2.4
ボール遊び	9	7.5	1	2.9	8	9.4
小計	78	65	38	111.8	40	47.1
ブランコ	22	18.3	3	8.8	19	22.4
すべり台	13	10.8	4	11.8	9	10.6
鉄棒	8	6.7	2	5.9	6	7.1
アスレ・ジャングルジム	6	5	0	0	6	7.1
シーソー	2	1.7	0	0	2	2.4
遊具	13	10.8	1	2.9	12	14.1
砂場(再掲)	13	10.8	3	8.8	10	11.8
小計	77	64.1	13	38.2	64	75.3
砂あそび・団子	24	20	7	20.5	17	20
秘密基地	14	11.7	2	5.9	12	14.1
小計	38	31.7	9	26.5	29	34.1
まごとお母さんごっこ	16	13.3	1	2.9	14	16.5
人形・ロボット	17	14.2	1	2.9	15	17.6
小計	33	27.5	2	5.9	29	34.1
虫取り	11	9.2	5	14.7	6	7.1
花摘み・葉っぱ集め	12	10	0	0	12	14.1
魚とり釣り	10	8.3	6	17.6	4	4.7
小計	33	27.5	11	32.4	22	25.9
ローラースケート	4	3.3	0	0	4	4.7
一輪車	5	4.2	0	0	5	5.9
縄とび	7	5.8	0	0	7	8.3
自転車	9	7.5	0	0	9	10.6
小計	25	20.8	0	0	25	29.4
TVゲーム	10	8.3	4	11.8	6	7.1

(%は全体：120人、男子：34人、女子：85人に対する比率。
不明1人は除く)

なお、かつて街角でみられたケンケンパやゴムとび、あるいは伝承遊びとしてのかごめ、花いちもんめ、お手玉などは、それぞれ1、2の人があげるにすぎなかった。

●鬼ごっこ・かくれんぼ

鬼ごっこは最も多い遊びの一つである。かくれんぼ、缶けりも加えると80件が追いかっこ型の遊びであり、これには男女差もほとんど見られない。時代を越えて変わらない集団遊びである。遊び場は、公園、学校、空き地、道、神社などあらゆるオープンスペースである。「遊具がなくてもできる鬼ごっこ、こおり鬼、手つなぎ鬼など様々な種類があるため毎日楽しくやっていた」(D女)というように、鬼ごっこはどこでもやれて、様々なバリエーションがあるのが特徴である。単純な遊びだが、走り回って運動量も多く「追いつ追われつ」のスリリングな時間は子どもの心を虜にする何かがあるようだ。

「落ちたらダメ」はジャングルジムやブロック塀などどこでもいいが地面に足がついたら負け。チャリンコ(自転車)に乗っての鬼ごっこでは、鬼はタッチか「突撃」をしてコカシたら鬼交代、というから「マンションの管理人や住民にいつも怒られた」、「よくケガをしていた」のも、さもありなん、である。その無鉄砲な荒っぽさも小学生の男の子ならば、さもありなん、である。チャリンコを使うものでは、移動範囲が広いということで、鬼は2、3人とする決まりを作っていた(H男)。このように子どもたちはより多彩な遊び方を見つけ、より面白くするためにルールを作り出していく。また、ある人は、クラスの女子の間で「鬼ごっこかくれんぼを混ぜた遊び」が流行ったこと、自身の言で「6年生にもなって鬼ごっこ？」だが、大休憩は「私たちが一番楽しそうに」運動場を走りまわっていたこと、学校の早く終わる木曜放課後みんなで公園に集まってやっぱり鬼ごっこをしたこと、公園は見晴らしがよくすぐ見つかったことを、述懐している(S女)。鬼ごっこに夢中になって遊ぶ仲間、つまりクラスの女子の間での一体感というか連帯感のようなものも感じられる。

●球技

ドッジボール、野球、サッカーが主なもので、他にも多種類のボール遊びが存在する。これらを球技とよんでおく。今ではこれらは、スポーツクラブに入っている習い事となっていることが多い。しかし「スポーツクラブ」の表記は皆無であったことから、「遊び」として捉えた。全体では78件になるが、男子に顕著に高率で女子はさして多くない。男女差が顕著といえる。

球技でとくに多いのがドッジボールで、19%の人がこれをあげている。このドッジについては男女の差は比較的開かず、女子にもドッジ人口は多いといえる。「ドッジが流行したのは小学校4年くらいから」(K

女)で、学校の休憩時間はもちろん、「始業前、友達と朝早くきて、放課後も日が暮れるまで」やっていたという人は、「本当にドッジボールに明け暮れていたんだ」「よく飽きずにやってたなあ」と今思い返して感じ入っている(M女)。昼休みには毎日、クラスの殆どの子が参加してドッジボールをしていたというが、「負けて大泣きして教室に戻っていく子や、運動神経はあまりよくないけどうまくかわす子など、様々なキャラの子がいていつも楽しかった」と当時の生々しい様子が語られる(T男)。さらに公園で知らない子どもたちのグループとケンカになりグループ同士が「ドッジボールで勝負をした」という思い出もある。因みにその後は勝ち負けに関わらずみんな仲良くなった、という(K女)。ドッジボールは、むずかしいルールもなく人数の制約がない手軽さもあったか、一時期、熱狂的に遊ばれるようである。

次に野球は、男子の4割があげている。「学校から帰るとすぐグローブをもって集まり、キャッチボールをした後、大体日が暮れるまで野球をした。」(M男、N男)や「ボールが見えなくなるまで遊んだ」(M男)の証言が続く。また野球をするのに「ボールがよく隣家に飛び込み、時には隣家の屋根を越えたことも」(A男)や「十数個のボールをなくした」(M男)など、必要な場所の確保には苦労した記憶も多い。

サッカーは、野球と同様、男子にみられる遊びである。Jリーグの開幕は93年5月、初めてのプロサッカー・リーグは全国に熱狂的なサッカーブームを引き起こした。彼らにしてみれば、もの心ついた頃にサッカーブーム到来であっただろう。これは14人があげていた。

なお、「兄にキャッチボールやサッカーを教えてもらい、男の子がするような遊びを、兄や父とやった」(T女)という女子はいるが、全体的には球技は、ドッジボールを除くと女子の参加は少なく、まだ「男の子の遊び」という状況である。

●遊具

遊具とはここでは、主として公園や校庭に置かれている固定遊具をさしている。固定遊具は77件(砂場含む)あげられており、男子より女子にその割合が高いのが特徴といえる。遊具の中では、まずブランコ、次にすべり台であり、その他鉄棒、ジャングルジムなど種々数えられた。公園等ではいわゆる定番といえる遊具である。(1)で前述したように、室内用の大型玩具のジャングルジムやすべり台、自宅の庭に専用のブランコや砂場を設置して子どもたちの遊び場になっていた例もある。

遊具は、一人でも集団でも遊べるが、集団で遊ぶことの方が多し、面白いといえよう。遊具の使い方では「ブランコをみんなと押し合って乗ったことも取り合ったことも良い思い出」(K女)、「他の友だちと順番

を並んで待つことも覚え、友だちとの接し方などいろいろなことを学べた」(M女)という人がある。T女は、アスレチックが「最初は怖かったがだんだんと登れるようになり、とうとう3階(一番上)まで登れた時はすごく嬉しかった」と今もそのときの達成感を記憶しまたアスレチックは遊びの中で運動的にも良いし、怖がっている友達を助けてあげるなど協調性も育てられたとも述べている。他方、ジャングルジムの高さがこわくて「何度もやろうとして途中で止めてしまったこと」、「とうとう一度も上まで行ったことがない」のを思い出した人もいる。小さかった頃の遊びの楽しさの中のほろ苦い思い出となっているのである。その不全感「今ならきっと上まで行けるので、今度挑戦してみよう」、となる(U女)。

さらに運動能力のレベルアップを直接の目的とするものもある。「公園の鉄棒で逆上がり練習をしたことをなつかしく思い出す」(O女、K男)、「手にマメができ、それがつぶれたこともある」(K女)、先の一輪車練習用の手すりも「学校で一番になろうと毎日夕方まで遊んだ」というように、遊びの中に「頑張り」や教育の要素が強く現れている。

これら正統的な遊びだけでなく、遊具の使い方は多様である。「公園で一番高いジャングルジムに登ってみんなで打ち上げ花火を眺めた」、「ウンティの上でお菓子を食べた」「すべり台など校庭の遊具を家にみたくてままごとをした」(Y女)「ブランコに乗って靴の飛ばし合いをした」(K男)など、それぞれが遊具で遊び、遊具にまつわる思い出を抱いている。

ところで、遊具は怪我などの事故発生でしばしば管理責任が問われる。「公園のブランコが取り外され…小学校に入ってから回転遊具が取り外され」悔しかった(O女)という思いは強い。たしかに「遊具は事故のたび撤去されている」が、何が原因かを突き止めて対策を立てるのが本来であろう。「正しい使い方すればそう事故にはつながらない」(I男)との主張もリスクを学習して自由に遊ぶという、前述した自然遊びに通じるものがある。事故やトラブルが、行政当局など設置者や敷地の管理者の責任として追及される土壌についても一考の余地があろう。

以上のほか、特徴的だった遊びについて見ておこう。

●砂遊び

公園や園庭には砂場が定番である。全体の24人があげており、男女差はない。スコップやザルを用いて、穴を掘る、山を作る、サラサラ砂や団子を作る、迷路を描いてゲームをする、砂場は子どもたちの創造性に溢れた場である。砂遊びについての生き生きとした様々なエピソードが語られる。

「みんなで1つの島を作りトンネルを掘ってそこに手を入れて、向こう側にいる友だちと握手したときは感動した」(N女)、「砂場に水路を作って遊んでいたが

そのうち複雑な迷路にしていき、そこを上手く水が通ったときは嬉しかった」(H女)、また砂場はどこまで深いのかを知りたくて「兄や友達と、お昼から夕方まで掘り続けたのが一番印象に残っています。結局、身長が足りなくて底は見えなかったですが。」(H女)子どもの好奇心と集中力には驚くばかりである。「子どもの頃は砂に触るのが大好きだったので、靴を砂の中に隠した、団子を作って食べてみることもした。今思えばよくぞお腹をこわさずに、というところだが」(A女)など。だから、砂遊びはみんなの人气があって、「砂場での競争率が高かったのをおぼえている」(H女)との証言もある。

定番の人気スポットとは言うものの、管理者や親にとっては公園の砂場が近年不興といわれる。砂がどこかへ持ち去られ維持が難しいということや、犬猫の糞尿が混入する危惧がその理由である。公園の砂場にはペットの糞尿が混ざっていて汚いと言われた経験をもつ人もいる。これに対して、学校や幼稚園のそれは、比較的安心と考えられているようである。一般的に、「最近に至るところ舗装化が進み、土とふれ合う機会が減ったのが寂しい」(H女)という人もいるように、都会では砂、土、泥、という自然の素材は得がなくなってしまった。そのことがまた、泥んこ遊びを「服が汚れる」という理由で禁止する親を作り出してしまうのかも知れない。

●秘密基地

空き地や裏山に自分たちだけの、大人には秘密のアジトをつくって、秘密基地と呼ぶ。秘密基地のことを書いている人は全体で14人、うち10人が女子である。

「近所の川べりの、木が数本生えていて少し暗くなっている」(Nm女)や、「神社の裏手は木や竹が生い茂って薄暗く、入るのはちょっと勇気がいる」(Na女)場所だった。その神社の裏の茂みは、「当時は自分たちしか知らないと思っていた。木の蔓にぶら下がり竹の子を採った」住宅地の中の異界であったようだ。さらに小高くて木も生えていて絶好のポジションであったために「多くの子がそこに秘密基地を作っていて、すぐ隣に別の基地があるという様な感じ」(S女)というものもある。木の上に作る小屋は典型的な秘密基地であるが、ここにはそのような手の込んだ例は見当たらない。「秘密基地といってもダンボールとか使って作った簡単なもの」で、他に発泡スチロールや「どこかの粗大ゴミからもらってきたようなもの」でできていた(N女、S女、N女)。その秘密基地で子どもたちは「机のようなものをもっていき、その上でお茶を飲んだ」(N女)、「“いす”を作りそこでお菓子をたべたり、話したりして“家族ごっこ”をしていました」(S女)、「お金を出し合って花の種を買い“庭”に植えてみたりして、そこで暮らしているかのように連日通っていた」(S女)などの遊びを繰り広げていた。

子どもにとって模倣は基本であり、模倣を通して生活行為を獲得し成長していく。基地遊びは、ままごと遊びと同様、家庭生活の模倣と思われる。だが、屋根や家具の「ようなもの」で、ある程度立体的に構成され、そこで実際におやつを食べたりして、長くても数ヶ月に過ぎないがそこに存続する、という点において単なるままごとではなく、まさに家なのである。さらには、彼らが自覚しているように、秘密基地は「自分達だけの秘密」というのが魅力的で熱中(N女)する訳で、親にどこで遊んでいたのと聞かれて、秘密!と言うのが楽しかった(S女)という。木下のいう「生活しているイエとは別に自分だけのイエを持つという潜在的な自立願望」というような成長段階の基本的プロセス¹⁰⁾を彼らは辿っているということであろう。

「今思えば全然それらしくない秘密基地」(K女)、「今思えば近場の子どもたちみんな知ってるような場所」(N女)、そして上述の秘密基地の団地!であったとしても、「こんなワクワクするものがあったなんて!とすごく感動しました」(N女)、「一緒に基地を作った友だちもつれて、今度あの場所を訪れてみたい」(S女)と述べているように、子どもの心に強烈な印象を刻みつけている。熱病の如くに熱中し、それでいてその果ては「けど2、3回しか遊ばず新しいところを探す」(S女)や「いつのまにか行かなくなった」(S女)という具合で、子どもの遊びの通過儀礼とみることもできる。

以上すべて女子で、男子の場合は遊んでいてもこのように詳細な記述が見当たらないのも特徴といえる。

●テレビゲーム(コンピュータゲーム)

テレビのモニター画面を利用して遊ぶテレビゲームは、リアルな仮想現実を提供する画期的なメディアで、現代の子どもばかりか大人にも広く親しまれている。しかし対象者でゲームをあげる人は意外と少なく、10人、8%程度である。また、「自宅にTVゲームがなく友だちの家やスーパーやゲームセンターにはまった。」

(M女)があるが、このように「はまる」という表現に類するケースは、この1件を描いては他にない。

ファミコン(任天堂)のスーパーマリオやドラクエのゲームソフトが売り出されたのは80年代後半で、フィーバー状態はその後も続いていたはずである。半面、テレビゲームに興じると外で遊ばなくなる、視力低下など身体へ悪影響がある、現実世界から逃避する等などが警戒され、子どもの遊びとしてのテレビゲームへの世間の風当たりは強いものがある。

こういう状況で、大半の子どもたちは以下のようにあった。「雨の日はテレビゲームのある家にみんなが集まってゲームを楽しんでいた」(N女、M女)、「家でテレビゲームもやったが友達と遊ぶのは家の外」(K男、S男)から、ゲームをするのは雨の日や人数の少ないときであって、「でも雨の日はそんなに多くないし、や

はり自分が家の前の道路を走り回っていた姿が思い浮かぶ」(N女)のである。「家にはゲーム機がなかったので、家の中で遊ぶときは人形遊びのようなことしかやることはありませんでした」(T女)と記す人もいる。家にゲーム機が無かったという人は他にも数名いて、家庭の教育方針などいかがえなくもない。ただし「公園でサッカーや野球をしていたが、阪神大震災で引越すると家でテレビゲームをするかゲームセンターに行くことが多くなった」(O男)のように、環境の変化で友達もなくゲームで一人あそぶのを余儀なくされる、という状況も推察される。

これらを総じてみれば、ゲーム機はそれなりに普及し、地域にはゲームセンターもあったが、予想外なことに、「はまる・のめりこむ」といったことはあまりなく、ほとんどの遊び方ができる子どもたちであった、といえようか。テレビゲームで遊ぶが、外遊びもするということである。もしくは、「テレビを見る」が遊びの例としてはほぼ皆無であったのが注目されると同様、テレビゲームが「遊び」の原風景・思い出とはなり難い何かがある、ということが考えられる。

(3) 遊びの仲間など

これまで遊び場と遊びについてみてきたが、人と人との関係も遊び場の記憶では重要な要素である。

「どんな遊具があっても遊び相手がいないと遊びに集中できなかった。“友達”あってこそその遊びであり遊び場である」とT女がいうように、子どもの遊び場の風景には仲間が基本的要件である。少子化がますます進行し遊び集団への影響が著しい。今の子どもは、児童環境調査(厚労省)でも同じクラスの子と遊ぶことが多く人数も2~3人程度になっている。またアポをとってからでないと遊びに行かない、行けない、という。しかし、リポートの中には「そこに行けば必ず誰かがいて、遊ぶことが出来た」(T女、O女)、「よく知らない子でも遊んでいるうちに自然と仲良くなった」

(N女)というように、相手を固定せず自在に遊んでいる人もあることがわかる。住んでいた「団地の友だち20人位でかくれんぼをした」(M男)思い出や、団地には小さい子どもが沢山いるので「小さい時あそこに住んでいて本当によかったなあと思う」(M女)という感想があるが、異年齢集団で群れて遊ぶ姿も見出すことができる。それを実現しやすくする環境は、ここにも述べられているように、団地つまり家族構成の良く似た集合住宅や、子どもの集まりやすい公園、広場の存在である。

集団遊びはきょうだいから始まるといってよい。だから、幼少時に自宅であそぶシーンにはきょうだいの姿がある(D女、K女)。あるいはいつも兄に連れられ(Y女)たり、妹たちの面倒をみながら(A女)のような、上の子が腰巾着風に弟妹を引き連れて遊ぶ姿も

なくはない。きょうだいと遊んだとする人は20人(17%)で、なぜか女子の方に高率である。兄に遊びを教えてもらっていたというT女は、「しかし兄とはすぐケンカになり格闘ゲームが始まる。私は泣いて逃げ回っていたけど、今から考えればそれも楽しい遊び」という。この例が示唆するように、きょうだいは遊び仲間として機能し、遊びの機会を広げかつ人間関係の間のとり方を学習する手段になる。

地域の様々な人との交流もまた遊びの中でおこなわれる。毎日のように遊びに行った友だちの家の人への思いを「うるさく騒いでも、イヤな顔ひとつせず迎えてくれたおばあさんに感謝しています」として、家の縁側に座って見守ってくれたおばあさんの姿が今も印象的という(M女)。また、すぐ近くの住宅に住んでいる人が、遊んでいる子どもたちのところへお菓子を持ってきてくれることもあったという。「川原には草木がいっぱいあったし、お菓子をもってきてくれるおばあさんやおじいさんもいたので、最高の遊び場でした」

(T女)子どもが可愛くてお菓子をあげる、子どもの方は好意を素直に喜んでいる、現在では得がたい光景ではなかろうか。前述のマンションの共有空間で遊ぶ子へ近隣の人がさりげなくかける「いい場所みつけたね」のひと言が何年経っても思い出される、のもそうである。地域のお年寄をはじめ大人との本当に何気ない交流が、人との関わり方の原体験となっていることに気づかされる。しかし地域の人との関わり例は多いとはいえない。

次に、遊び方についての記憶では、「傘を広げてキャンプごっこ、葉っぱをお金にしてお店やさんごっこ、さまざまな身近にあるものを使って遊んでいた記憶がありありと思い出された」(T女)のように、遊びは既成の玩具だけではない、クリエイティブであったと何人かが強調している。「自然にあるものを使って自分たちで遊びを考え出すのが楽しかった」(T女)、「どんな場所でもそこで出来る遊びを考えて遊ぶ」(M女)、「何もないからこそ何でもできる」(T女)など、遊びの想像力と創造力の結晶のような意識もみられた。

最後に、遊んだ時間の記憶について触れておく。これは、読みとれる例は少なかった。ただ、「日が暮れるまで遊んだ」のは7人(男5、女2)みられた。「団地の公園では、日が暮れて母が迎えにくるまで遊びまわっていた」(T女)ように、遊びたいだけ遊ぶ、これができるのもまた子どもの特権である。

4、結語

子どもの遊び場は、自然、他者、事物とのかかわり合いの過程で人間として成長していくために必要な「人間形成空間」である¹¹⁾とらえ、遊び場原風景についてのイメージを子どもの生活世界の側からとらえる

ことを試みた。対象として大学生を選び、子どもの頃の遊びの思い出を顧みた。自由記述という調査方法の性格から、遊びの全体を掌握しえたわけでもないが、あえて遊び場の特徴をまとめるならば、以下のようである。

- 1) 都市に住む者にとっては、公園が遊び場として浸透し定着しつつある。遊ぶ仲間、好きに遊べる遊具と広さがどうにか保障されるのは公園である。これまでの人びとの思い出に生き続けてきた原っぱや空き地は、情緒的な面も含めて公園に変わろうとしている。
- 2) 遊び場の多くは外部空間であり、外遊びの減少についてはとくに幼少時には当たらない。
- 3) 遊びの種類では、鬼ごっこやかくれんぼが健在で、球技ではドッジボールや野球、そしてブランコなどの遊具遊びが多かった。砂場、秘密基地に深い思い入れがみられた。
- 4) 遊びと遊び場には、依然男女差の明確なものがある。家の中や遊具は女子に、野球やサッカーは男子に高頻度である。
- 5) テレビゲームやテレビを遊びの原風景にあげる人は僅少である。

最近の子どもはゲームばかりして、外で遊ばない、沢山の子どもが群れて走り回って遊ぶことがない、そもそも塾や習い事に忙しくて遊ぶ時間がなくなっている、といわれて久しい。しかし、今回対象となった和歌山大学学生においては、すこし違っていた。大方は、いわれるほど遊ばない訳ではなく、遊びにうつつをぬかしていた感もそこかしこで得られた。テレビゲームは適度にあそび、外遊びの楽しさを知っている。友だちも大勢いる。いつでもどこでも遊びを発見し、たくましく遊んでいる。彼らの子ども時代の遊びは多彩で活力と余裕に満ちていたようにみえる。それだけ恵ま

れた環境の下に育まれてきたということかも知れない。

また、自らの子ども期をふりかえり遊び場の原風景にたどり着いたとき、次のような、感傷と郷愁と安らぎの入り交じった記憶を記している。「…いずれの記憶も夕焼け時の公園で、しかも“帰りましょう”という合図を込めた夕焼け小焼けのチャイムが今でもはっきり心に焼き付いている。何か泣き出しそうになる、切ない記憶だ」(Ma女)、「もうあの場所を取り壊されたが、今でも記憶にしっかり残っているのが自分でもうれしい」(Mi女)等など。どんな遊びであれ、全身全霊しっかり遊ぶこと、そしてその遊んだ記憶を顧みることが、その人のアイデンティティの獲得に寄与していると示唆される。

教養科目「子どもと暮らし」(H17)のレポートを使用させていただいた受講生の皆さんに感謝します。

文献

- 1) 山本さゆり「現代の子どもの遊び空間のあり方について ―きのくにプレーパークを中心として―」H15年度和歌山大学卒業論文
- 2) 中あゆみ「小学校における休み時間の児童の屋外遊び場所とプレイランドの必要性について」H17年度和歌山大学卒業論文
- 3) 仙田満『子どもとあそび』岩波新書、1992
- 4) 高橋勝・下山田裕彦『子どもの＜暮らし＞の社会史』川島書店、1995
- 5) 木下勇『遊びと街のエコロジー』丸善、1996
- 6) 奥野健男『増補文学における原風景』集英社、1989
- 7) 前掲書3)、p17
- 8) 前掲書3)、p9
- 9) 谷田貝公昭『図解・子ども事典』一芸社、2005、p141
- 10) 前掲書5)、p33
- 11) 前掲書4)、p5